

寒い季節は映画にしよう

この秋、札幌でまた映画館が文字どおり幕を閉じた。南一条通りの日本劇場、それに狸小路の帝国座。日劇は戦後のオープンだったが、かつてはその北隣りに丸井デパートの記念館があって、ここも一時期“名画座”という名で商業映画を上映していたし、丸井デパート内部にもニュース専門劇場があった。いわばこのあたりは映画のメッカの一つだったのに、これが消滅したことになる。

帝国座はすでに閉館している遊楽館(三丁目)日活館(現東宝プラザ)と共に、狸小路に戦前からある映画館のひとつであり、いわば狸小路という盛り場の中心的存在だった。

ちなみに言えば帝国座のあった狸小路一丁目は今と違って北側がせり出して来ていて、道幅がせまく、また帝国座向いは北に入って西に抜ける露地があり、観音様をまつるお寺が奥まった所に位置していて線香の匂いが絶えなかった。市内でも一際下町情緒の深い一角だった。

戦前からを思い出すと、今なお健在なのは札幌劇場と東宝公楽(昔は美満寿館と呼んでいた)。二つともビル化して他事業も入居させて生き残っている。だがかつて最大の収容力を誇った薄野の松竹座は第三グリーンビルとして知っている人はいても、ここで映画を見るために、すすきののロータリーの角まで列が出来たなど覚えている人は少ないだろう。昭和二十三・四年頃のことだから、五十年も以前の話だが。

それにしても映画人口の凋落ぶりは目をおおうばかりだ。もっとも私自身、若い頃は「オレから映画を取ったら何が残るだろう」と考えたりもしていたのだが、実は正直映画館へ運ぶ足の数にめっきり減っている。外国映画が原題をカタカナにするだけで、さっぱり意味も中味も分からないせいもある。でも近頃、日本映画仲々のものが多い。

消える映画館で感傷にひたるよりも”よし、映画を見る数を三倍にしてやる”なんて近頃考えている。それもなるべくなら独立館で。